時を訪ねて

フォークゲリラ

新宿（東京都）

歌声が呼び水 政治議論

新型コロナウイルスの感染拡大で緊急事態宣言が出る前の4月初め。1人の女性が東京・新宿駅西口地下広場に立っていた。世田谷区の大木晴子さん(71)。「マスク2枚でごまかすな」と書かれたプラカードを持つ。演説禁止の場所なので無言を貫く。目を留める人もいるが、多くは黙って通りすぎる。

2003年にイラク戦争反対の意思を込めて始めた毎週土曜のプラカード行動。その時々の思いをスケッチブックに記し、掲げる。「アイコンタクトしてくれる人もいます。言葉から何かを感じ取ってほしい。そう、あの時のように」と述べ、宙を見つめた。

1969年。東大安田講堂を巡る警察と全共闘らの攻防戦が終わり、学生運動は下火になった。暴力闘争に違和感を持つ若者は、作家の小田実さんらが呼び掛けた「ベトナムに平和を！市民連合」（ベ平連）に集った。

「平和のために力を尽くしたい」。高校を出てアルバイトをしていた大木さんもベ平連へ。しかし、活動はデモ行進が多く、いま一つ大衆へのアピールに欠ける。関西のベ平連の学生が大阪・梅田の地下街でギターを弾くのを見て、歌を採り入れることに。若者文化の中心だった新宿を「舞台」に選んだ。

69年2月27日。大木さんら数人が1・7㍍の広さがある西口地下広場でギターをかき鳴らし、反戦フォークを歌った。まずは「友よ夜明け前の闇の中で…」で始まる岡林信康の「友よ」。初めは緊張で声がうわずった。

やがて遠巻きにしていた通行人も歌の輪に。毎週土曜の集会は次第に人数が増え、フォークゲリラと呼ばれるようになった。歌声がやむと、政治から文化、恋愛と議論が始まる。当時の映像を収めた映画「'69春～秋 地下広場」からその様子がうかがえる。

「（学生運動を）やるのはよー、今のうちだけだよ」、「おじさんもさ、資本主義の中の犠牲者なわけよ、気がつかないの？」

6月28日。聴衆は過去最高の7千人に達したが、それは終幕への序曲でもあった。

文・斉藤 佳典
写真・植村 佳弘

＝2面に続く

当時のフォークゲリラの活動を胸に、新宿駅西口地下広場でスケッチブックに自ら描いたスローガンを掲げる大木さん。通行人にまなざしで訴える

歌う若者、語る若者が集ったフォークゲリラ。報道時の姿も見える＝1969年5月